

## 優秀賞

「むかし僕が死んだ家」 東野圭吾（講談社）

健康栄養学科 鵜飼恵里花

私がこの本に注目した理由はズバリ、このタイトルだ。この推理小説には名前すら出てこない主人公の「私」と、彼の七年前の交際相手であった「沙也加」の二人しか出てこない。全体が謎めいた構成である。また、この二人が活動している範囲がとても狭く、場面が全く動かない中で物語が完結するところが面白い。

ある日「私」は、沙也加から二つの相談を受ける。一つ目は自分の子供のことを愛することができないという相談。二つ目は沙也加の父親の遺品の地図と鍵の謎を一緒に解明してほしいというもの。

沙也加は幼少の記憶が全く無い。そこで、自分が無くしている幼少の記憶を取り戻せば自分が子供を愛することができない理由が分かるのではないかと考えた。そこで二人は、遺品の地図に示されている謎めいた白い家に、遺品の鍵で侵入し、謎を解明していく。昔白い家に住んでいたと思われる佑介という名の少年の謎の日記には沙也加の記憶のカギが散りばめられていた。家を調べていくうちに沙也加は次第に記憶を取り戻していく。幼少の頃、白い家に来たことがあって、黒い花瓶、緑のカーテンのある暗い部屋があることを思い出した。早速その部屋を二人は探したが、どこにも見当たらなかった。このように沙也加の記憶が戻るたびに数々の白い家と沙也加の記憶の矛盾がでてきて、謎が解明されるどころか、ますます謎が深まってしまう。

謎が解かれていくにつれ背筋が凍るような事実が明らかになる。佑介の日記や家具等から明らかになる白い家の存在の意味。そして沙也加という人物の衝撃の正体に読者は血の気が引くだろう。

作者の罠にはまり、ページをめくる手が止まらなくなる。すべて読み終わったとき、『むかし僕が死んだ家』というタイトルの本当の意味が分かる。